

ルールが機能する分岐点

新型コロナウイルスで、日本は、自粛・休業要請・お願いのオンパレード。

他国が罰則を伴った禁止令であるのと対照的です。日本人は「お上」の要請に素直に従うから罰則は不要という意見が出る一方、罰則がなければ強制力はないとばかりに、「要請」に従わない人もかなり存在する。

法・規則・命令・ルールが、日本で機能するかを考えるとときに、次の二つの例を持ち出す。

一つは、電車内での携帯（スマホ）通話禁止と電源オフのマナー。

電車内には「通話ご遠慮」「優先席付近では電源オフ」の表示があるが、通話禁止は守られても電源オフは守られていない。なぜか？



もう一つは、エスカレーターの片側立ち。

ルール表示がなく、片側立ち禁止の啓発をしても守られている。誰も歩く人がいないのに、上りエスカレーターの下に人が滞留するほど守られている。なぜか？

罰則がなくても守られるのは、ルール破りへの不利益が具体的にイメージできるからというのが、私の分析である。電源オフが守られないのは、影響を受ける人がいる確率が低く、違反しても文句が出ない。対して、通話は周囲から冷たい視線が来る。エスカレーターは後ろから歩いてくる人に文句を言われる。強面の人が来たら尚更だ。実に分かり易い。

すると、自粛要請が守られないのは、罰則なしが本質的理由ではなく、違反への不利益が具体的にイメージできないからであろう。かといって村八分的な対応は人権侵害・人道的問題になる。具体的不利益として罰則では芸がなく、妙案も出てこない。「お天道様が見ている」も死語に近く、感染症が社会に与える影響の啓発しかないのが、もどかしい。（山下輝年記）

編集後記

SOCIAL DISTANCING? PHYSICAL DISTANCING?

緊急事態宣言が5月7日以降も続く。国を挙げての懸命の努力にもかかわらず、新型コロナウイルス感染症の蔓延収束にはまだまだ時間がかかりそうです。一方で、長期の外出自粛対応を強いられる副産物として、劇的な社会変革が進んでいるようです。リモートワーク（在宅、サテライト勤務）、WEB会議など、今までわかってもできなかったことが大ブームで、職場と家庭の距離感が一気に変わろうとしています。

いうまでもなく、感染拡大予防として重要とされているのは、いわゆる3密（密集、密閉、密接）を避けることです。これを世界的にみると、SOCIAL DISTANCING（2m程度の社会的距離を保つこと）が強調されていますが、一方で、WHOはこの用語はSOCIALではなくPHYSICALにすべきとっています。その意味としては、SOCIALには社交的という意味もあることから、人の距離を広げるのは物理的（PHYSICAL）距離だけで心の距離は今まで通り保ち、不安や孤立を避けることが重要であるからとっています。そうするとITを使っただけのコミュニケーションがますます重要になりますね。

ところで、私が個人的にこのところ気になっているのは、DOMESTIC DISTANCING（家庭内距離。こんな言葉はないですが!）の問題。普段いなかった人がずっと家庭内にいることで、家族のありがたさを改めて感じるとともに、予想しなかった負担やささいな軋轢を生じること。家庭内距離をどう保つかも、大変重要なことですね。

皆様、くれぐれも心身を大切に。

（島岡聖也記）